

専修大学空手部はコロナ禍による危機をどのように乗り越えたか  
——先輩ゼロからの部活動再生への挑戦——

専修大学体育会空手部  
主将 仲村謙吾  
主務 相河凜音  
副将 甲知成

## 1. 専大空手の歴史と伝統

本稿はコロナ禍による部員減少によって一学年3名だけになってしまった状態から、1年生から4年生まで揃って合宿稽古や対外活動を再開し高い評価を得ることができたまでの3年半の道のりを記述したものである。空手部の再生に向けて苦労を共にした現4年生幹部3名（仲村謙吾主将、相河凜音主務、甲（かぶと）知成副将）を代表して主将の仲村謙吾が全体の取りまとめと執筆を行った。

現在世界中に普及している空手道は今から100年ほど前に船越義珍先生によって沖縄から本土に伝えられた。専修大学体育会空手部（以下「専大空手部」）は、船越先生を祖とする松濤會の直系として80年余の長い歴史を誇る部である。専大空手部は、対外試合を一切行わず、「空手に先手なし」という船越先生の理念に基づき、基本技、型そして約束組手を中心とする稽古を通じて心身を鍛錬するという独自の伝統を守り続けてきた。

現在は、水澤等師範、芦口健監督、梅田哲史助監督のご指導によって、ひたすら肉体的に追い込む稽古のみならず、実際の攻防を想定した稽古も行われている。稽古で培った技術を応用しつつさらなる高みを目指せる現在の指導体制は、深い人間理解にもとづき、人間的にも成長していることを現役部員に実感させ、貴重な経験を与えてくれている。

専大空手部には過去に100名を超える入部者が押し寄せ、体育会の支柱であった時期もある。しかし、近年のコロナ禍を境に入部者が激減し、現4年生が入部した当初、部には3年生と4年生が2名ずついるだけであった。そして貴重な先輩であった3年生もやがて退部してしまったのである。

私たちが2年生になるまで、感染予防のため以下のような厳しい制約下で活動していた。  
①稽古中でも常時マスクを着用。②身体接触を伴う稽古は控える。③生田校舎でのみ道場を開放し、神田校舎の施設は使わせない。④合宿は禁止。

かつて隆盛を誇り、80年以上続く伝統ある専大空手部がコロナ禍によって存続の危機に直面していた。専大空手部は強化指定部ではないため、スポーツ推薦で入部してくる新入生

はいないので、新入生勧誘に失敗すればすぐに廃部の危機に見舞われる。そんな厳しい状況で専大空手部の看板を守り続けられるのかという不安が、現役部員のみならず、監督、師範、OB および嶋根克己部長をはじめとする大学関係者の間にも漂っていた。

## 2. 最初の合宿と先輩の背中

現4年生幹部である私たちの最初の合宿は、2023年3月に静岡県御殿場市にて行われた4泊5日の春合宿であった（夏合宿はコロナにより実施が禁止されていた）。当時3年生はすでに退部していたため、合宿参加者は4年生女子2名と1年生男子3名のみの計5名という体制で実施された。かつての賑わいを知るOBからすれば信じられないほど寂しい合宿であったが、私たちにとっては環境が厳しいからこそ学びも多かった。稽古は1日3回行われた。初日から足裏の皮は剥け、階段を降りるのもままならない程の筋肉痛に苛まれているにも関わらず、限界まで追い込まれる稽古が続けられた。身体的にも精神的にも本当に辛かった状況の中、仲間同士でお互いに声を掛け合い切磋琢磨に努めたあの合宿は、私たちにとって非常に良い経験となった。

指導陣の方々が我々につきっきりで稽古をしてくださったため、普段の稽古では教わることが出来ないような高度な稽古内容も教示していただいた。それは徹底的に基礎を磨き上げた者でないといけないような高度な稽古であったが、我々1年生はなんとかその稽古についていくことができた。ここで、未熟な我々でも、日頃からしっかり稽古を積み重ねれば、指導陣が教えてくださる応用稽古にも順応できるのだと分かると同時に、日々の成長を身に染みて感じる良ききっかけとなった。

それでも、厳しさに押しつぶされそうな我々を励まし、気にかけてくれたのは私たちが「こんな先輩になりたい」という意識を強く持つきっかけとなった、当時の4年生の先輩方であった。相河主務は「あの先輩方が居なかったら、俺は空手部を辞めていたと思う。それだけ、あの二人の先輩の影響は大きかった」と述べている。普段からあまり感情を表に出さない相河主務であるが、実は私も甲副将もそう感じていた。当時の4年生の先輩方（佐藤優衣主将、水野凜主務）は、「私たちは一生懸命やっているのになぜか部員が辞めていってしまう。業績が上がらない会社の社長のような気分」と述べていた。当時の4年生の苦しい胸中がよく理解できる。

そのため、空手部存続の危機の中、新入部員が3名も入ってきてくれたことは奇跡に近い出来事であり、絶対に手放してはならない貴重な人材であると当時の4年生は考えていたようだ。4年生の先輩方が指導する際には、それぞれの部員の癖や悪い所を細かく丁寧に指導してくださったため、稽古へ積極的に参加する意義を私たちは見つけることができた。ま

た稽古が終われば、優しく接してくれる「かっこいい先輩」であり、もっとこの人たちから教わりたいと感じさせてくれた。厳しい合宿後、当時の1年生同期3人で焼肉を食べに行っていたが、4年生が卒業したら「自分たちは、先輩らのようにこの専大空手部を継いでいけるのだろうか」という不安を強く感じていた。そうした中で新2年生3人だけの新学期を迎えることとなる。



静岡県にて行われた合宿の稽古風景

### 3. 最上級生としての責任の重み

2023年3月に4年生の先輩が部を去り、4月以降私たち2年生が最上級生として部を支える立場となった。コロナによる活動制限は徐々に緩められてきたが、部の運営については右も左も分からない状態で、新入生勧誘活動から多様な行事の運営まで、すべてを私たちの力で解決しなければならなかったのは想像以上に大きな負担であった。

特に大きな挑戦となったのが、2023年10月の「日本空手道松濤會学生連盟演武大会」の専修大学での開催である。専大空手部は、「日本空手道松濤會学生連盟」に所属(以後、「学連」)している。現在学連に所属しているのは専修、成城、学習院、中央大の4校である。学連委員長は、これらの各大学空手部内における役職の1つであり、松濤會本部、松濤會各支部、他大学との連絡役を果たす本部直属の立場となっている。

私は当時、専大空手部の主将を拝命すると同時に、4大学を束ねる学連委員長も務めることとなった。通常学連委員長は、その年の演武大会主催校の4年生(最上級生)が就任するのが慣例であった。しかし、成城→専修→学習院→中央という順番で主催校が回っていく関係上、私たちは2年生で、しかも白帯でしかないのに主催校幹事として他大学の上級生と交渉しなければならなかった。主将と学連委員長という2つの重責を突然任され、何も分からない状況の中、演武大会を主催することは私にとって困難を極めた。何度この重責から逃げ出して、自由の身になりたいと思ったことだろうか。

しかし、この場で私がこれらの責務を果たさずに逃げ出せば、誰かが代わりにこの重責を背負うことになる。それが、私の同期である相河主務と甲副将であった。私が抱えていた数々の課題を彼らへ押し付けてしまえば、ただでさえ部員も少なく、後輩たちへの指導もままならない中、この空手部を再生することが出来るであろうか。私にそのような無責任な行動をとる余地は無かった。

自分は、卒業した先輩方から2年生でありながらも、主将、学連委員長という重要な役職を任命された人間なのだ、と自分自身を鼓舞し続けた。もしここで逃げ出してしまえば今後どんなに些細な壁にぶつかったただですぐに諦める癖がついてしまうということを恐れ、私はこの責任を全うすることを決めた。

演武大会は、大学生のみならず社会人や子供も含めた300名ほどの参加者が集まる大規模な催しである。そのため、私たちは2年生部員全体で仕事を分担しながらなんとか役割を果たした。会計は甲副将が担当し、納会や予算管理、領収書の精算など細かな調整に奔走した。一方で私と相河主務は参加者の確認をするために招待状を作成し、全国にある支部や要人へ送付した。また、弁当の発注や会場の確保まで全てを担い、まさに満身創痍の状態で大大会を支えた。大会運営中に些細なトラブルにも見舞われたが、大事が起きることなく何とか乗り切ることができ、専大空手部の面目を保つことができた。

この成功体験は、部員全体で非常に強い達成感を共有することができた。同時に、少人数でも知恵と努力次第で大規模な行事をやり遂げられるという大きな自信を与えてくれた。演武大会終了後、芦口監督から「よく頑張った。お前らは専大空手部の誇りだ」と言われた際は、途中で諦めなくて本当によかったと自分を褒め称えたことをよく覚えている。





上：専大空手部集合写真 下：全体集合写真

#### 4. 専大空手部の新時代の幕開け

前節で記した演武大会の裏で、非常に大きな役割を果たしてくれたのが現在の3年生達である。私たちが2年生で幹部となり、初めて行った新歓には多くの悩み事があった。そのうちの1つに、3、4年生という上級生がおらず、黒帯もない空手部に、新入生は興味を持って入部してくるのかという不安があった。空手を人に教えた経験の無い我々が、体験稽古で空手未経験の者たちに空手を教えることは非常に難しかった。

しかしその反面、先輩として後輩らに恥ずかしい姿を見せられないという意識が芽生え、更に稽古に励んでいこうという感情が湧き出てきたのだ。そうして、勧誘ビラの作成、体験稽古への勧誘まで、同期3人で神田と生田の2か所で創意工夫しながら最善を尽くした。甲副将には、神田キャンパスでの稽古再開を目指し、多くの場面で動いてもらった。「神田稽古」の再開こそ、部員を集めるために重要な要素であるという結論に至ったからである。そのタイミングで、5月から神田体育室の借用が開始されるとのポスターを目にした。甲副将はすぐさま所管である学生生活課に申し込みに行った。当初、コロナの影響で他団体は全く利用していなかったため、すぐに借りることができた。生田・神田両キャンパスにおける空手部再建のためにいかに我々が必死になっていたかが理解できる。今思えば、現在の空手部があるのは、この新歓活動がターニングポイントになったといえよう。

しかし、新入生勧誘活動を行うには、当時の空手部はあまりにも部員が少なかったため、中央大から応援部員を募り、ビラ配りを手伝ってもらった。また、卒業した先輩方も仕事の合間を縫って来学し、ブースでの待機や、新入生への勧誘の協力もしてくださった。その結果、4名の部員を獲得することが出来た。彼らは、弱音を吐かず、我々の稽古にしっかりとついて来てくれた。そのことが、私たちは本当に嬉しかった。そして今では技術のみならず、部の運営面においても非常に頼りがいのある面々となってくれた。翌年の新歓でも、後輩た

ちと協力して勧誘を行った結果、4名の部員を獲得することが出来た。私たちが新たに築いたこの伝統を引き継いでくれる後輩がいることが、今後の空手部発展の礎となるだろう。

だが、新入生の加入は部にとって喜ばしいことであったが、部の雰囲気や厳しい稽古方針に心が折れてしまう後輩もいた。近い学年の先輩とのつながりが途絶えてしまったため、私たちは新たなやり方で後輩を支える必要があった。そこで取り入れたのが積極的な「メンタルケア」である。稽古中の声かけだけでなく、稽古外の場面でも積極的に後輩と関わることを心がけた。稽古前後や帰路に着いた際には、一緒に歩きながら普段の日常生活や大学生活に関する話、悩み事を聞いてみたり、食事に誘い、少人数で相談を受けたりすることで、後輩の抱えている不安を少しずつ解消していった。この取り組みは単なる「部員確保」とどまらず、互いを支え合う新しい専大空手部の伝統を築く第一歩となった。また、年に2回部員全員で旅行に行く計画も立てたりもした。今年は、春期休暇に秩父、夏期休暇には鬼怒川温泉へ行った。部員からの評判もかなりよく、部の結束力を高める良いきっかけになったと感じている。今後も、このような部員同士の関わりを通じて仲を深めていき、お互いに空手を高め合える友情を築き上げていきたい。



鬼怒川温泉旅行にて撮影した写真

## 5. 黒帯の取得と部としての再生

入部者の増加により、少人数ではあるものの部活としての形が整い始め、稽古や合宿にも活気が戻ってきた。夏合宿では学年を超えた一体感が芽生えたことで、部の再生を確信することができた。そして3年生となった私達はついに夏期審査会において初段を許可され、黒帯を取得することができた。専大空手部にとって黒帯授与は数年ぶりの快挙であり、後輩にとっても「努力を積み重ねれば結果は出る」という大きな証明となった。私が大学人生の中で1番嬉しかった思い出は、この“黒帯を獲得した瞬間”であった。

正直に言えば、私は黒帯を獲得したら自分にとっての目標が達成されたことになるため空手部を辞めるつもりであった。しかし、主将や学連委員長を務めた経験を通じて、もっと空手を追求していきたいと思えるようになり、空手の奥深さや面白さを教えてくださった専大空手部の関係者や他大学の方々に改めて感謝するきっかけにもなった。黒帯を取ったから終わりなのではなく、ここからが逆にスタートなのだと気持ちを切り替えることにも繋がった。



後輩から初段を記念してプレゼントされた黒帯を締める現4年生3人  
(左から甲、仲村、相河)

## 6. 松濤會創立90周年式典における外部評価

2025年、日本空手道松濤會は創立90周年を迎えた。これに伴い、国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて、松濤會に所属している4大学以外にも世界各地から支部員が集まり、日頃の稽古の成果を披露する演武会とともに、今後の松濤會の益々の発展を願うための式典が盛大に執り行われた。専大空手部はこの大舞台において他大学を圧倒する見事な演武を披露し、観客や関係者から高い評価を得た。さらに長年の貢献に対して、松濤會から感謝状と記念品を授与された(写真1)。この出来事は、専大空手部が存続の危機から立ち直り、学内外にその存在意義を示す好機となった。このイベントは『ニュース専修』にも掲載され、私たちの努力が専大全体に認知されることとなった(写真2)。



写真 1



写真 2

## 7 全学年がそろった合宿と 4 年生の到達点

2024年11月、専修大学陸上競技部の箱根駅伝への出場が決定したことで、専大空手部と昔から長い付き合いのある専修大学全学応援団から、空手部に対して応援協力のオファーが届いた。この機会は専大空手部を世に知らしめる滅多にないチャンスであると感じた我々は、そのオファーを快諾して、箱根駅伝応援に協力することとした。その結果、多くの専大関係者の方々から賞賛の言葉を得ることができた。

また箱根駅伝応援を縁としてプロのカメラマンである服部健氏に広報用の写真を撮影してもらうことができた。これらの写真は、どれも構図とピントが決まり、新歓や SNS で利用すれば大きなインパクトを生むのではないかと私たちは感じた。そうして最高学年となった今年の春には、これらの写真を最大限活用して、再びビラやポスターの作成、そして新たな試みでもある配布用ティッシュの作成を進めた。そうして過去の新歓活動の経験も活かし新生の勧誘に挑んだのだが、獲得できた新生は 2 名に留まった。しかしながら専大に空手部があるということを新生に周知させることには成功したと自負している。

2025年夏には専大空手部として数年ぶりに1年生から4年生まで全学年が揃った合宿を実施することができた。決して多い人数とは言えないが道場には活気が戻り、4年生全員が二段を授与されるという成果も得られた。ここまでの歩みを振り返ると、部の存続そのものが危ぶまれた状況から、多くの創意工夫と仲間の努力によって専大空手部の「再生」へと導けたことに大きな誇りを感じる。



服部健氏に撮影頂いた写真



今年度の夏期合宿での集合写真

## 8 今後への展望

2025年9月、成城大にて学連合同稽古が行われた。準備運動、移動基本、型、組手の4種類を4大学の主将がそれぞれ分担して指揮、指導をすることが恒例となっている。各大学が普段どのような稽古を行っているのかを相互に知る良い機会でもあるが、空手道を追求する学生同士の交流も重要な目的である。専大空手部主将、仲村は、他大学の空手部員とその指導者の前に立ち、移動基本の号令をかける機会を得た。この日は、4大学に加えて東邦大学、東京農工大学も参加し、各大学の監督や師範そしてOBも参加していたため総勢90名近くで稽古を行った。このような大人数を相手に号令をかけることは初めての経験であり緊張もしたが、威勢のある専大空手部の雰囲気了他大学へ伝えることができた。

専大空手部はコロナ禍を通じ、新たなスタートを切った。専大空手部の歴史を守り抜くことは容易ではなかったが、入部して1年も経っていない未熟者3名が、大学生活4年間をかけて専大空手の歴史と伝統を守り通したと自負している。

上級生不在の中で幹部として舵取を任され、伝統を守りつつ新しい価値を築いた3年半は、私たちにとってかけがえのない財産となった。リーダーシップを発揮し、困難に直面しても諦めず、仲間を信じて前へ進んできた経験は、今後の人生においても大きな遺産となるだろう。

そして後輩らには「人数が少なくても創意工夫と努力次第で未来は切り開ける」ということを伝えたい。専大空手部が次の世代へと受け継がれ、さらに発展していくことを私たちは心から願っている。いま、私たちは尊敬していたあの先輩方のようになれたのだろうか。もしなれていなくても、これからもその姿に近づけるよう努力していけばよい。私たちは遠くから専大空手部を卒業してOBの立場となる。今まで私たちが受け取ってきたOBの方々の数々の支援を、今度は我々から後輩への支援として手渡していきたい。





上：学連合同稽古の風景 下：部員集合写真

### おわりに

最後に、この文章を作成するにあたり、専修大学人間科学部社会学科 嶋根克己教授には終始適切なお指導を頂きました。ここに深謝の意を表します。